「旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金」主催によるパネル展
協賛：公益ヘルティ財団
後援：ドイツ外務省

平和革命から再統一へ

出典：Bundesregierung/Lehnartz

革命前夜の東独

1987 年 9 月 7 日、ボン。ドイツ民主共和国（東独）の国家評議会議長兼社会主義統一党書記長エーリヒ・ホーネッカーは、ドイツ連邦共和国（西独）を訪問、西独のヘルムート・コール首相は礼節を尽くしてこれを迎えた。このとき、東独のドイツ社会主義統一党（SED）政権は、体制の基盤をいっそう固めたかのように見えた。しかし東独政府が、西側とは一線を画する姿勢を崩さず、西独による東独国家の承認をあらためて要求していた一方で、モスクワからは別の風が吹いていた。ペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）をかかげて、ミハイル・ゴルバチョフが、疲弊した超大国を改革し、西側に接近しようとしていたのである。モスクワ政府は同時に、同盟国に対して、次第に自主性を認めるようになっていった。ポーランドとハンガリーは改革の先陣を切った。しかし東ドイツの SED 指導部は新しい方針を拒否した。かつてはソ連を手本に「勝ち方を学ぶ」ことを望んでいた東ドイツで、今は突然、スターリン主義に批判的に取り組む姿勢を見せたソヴィエト映画や、ソヴィエトの雑誌『スプートニク』が禁止処分を受けた。東ドイツは自らの陣営の中で次第に孤立し、SED の党員たちも、党幹部に疑いの目を向けるようになっていった。しかし幹部らは頑迷であった。「ベルリンの壁は今後 50 年、いや 100 年はそのまま残るだろう」とホーネッカーが語ったのは、1989 年初頭のことである。

東ベルリン、共和国宮殿、1986 年 4 月 17 日。ドイツ社会主義統一党第 11 回党大会開幕。

見せかけの安定

1987 年 9 月 7 日、西独の首都ボンで、西独首相ヘルムート・コールは、東独の国家＝党の指導者エーリヒ・ホーネッカーを軍隊式の礼を尽くして出迎えた。

1987 年 6 月 28 日、東ベルリン。教会集会の最終イベントで、国家と公認教会の改革を求めてデモをする平和運動グループならびに「下からの教会」運動のメンバー。

1988 年 11 月 19 日、『スプートニク』誌は、郵送雑誌リストから抹消され、事実上、発禁処分となった。処分のきっかけは、ヒットラー・スターリン協定ならびにソ連に亡命したドイツ人共産主義者の運命を書いた記事であった。写真は、発禁処分となった。1988 年 10 月号表紙。

まるであべこべの世界 ――ソ連共産党書記長 ミハイル・ゴルバチョフがドイツ連邦共和国を訪問。1989 年 6 月 16 日、ドルトムントの住宅設備メーカー、ヘッシュ社を訪れ、熱烈な歓迎を受けた。

1989 年まで両ドイツ国家を分断していた国境は、長さほぼ 1400 Km。東独政府の国境政策により、国境で、そしてベルリンの壁で、800 人近い市民が犠牲になったと推定される。写真は、ブランケンシュタイン・アン・デア・ザーレの国境施設。1988 年。

出典：Bundesarchiv, Bild 183-1986-0417-414, Fotograf: Franke | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 87_0628_EvKT_03 | Bundesregierung/Schambeck |StAufarb, Bestand Uwe Gerig, Nr. 4223 | Sputnik, Oktober 1988 | Bundesregierung/Schaack

危機に陥る経済と社会

1980 年代、東ドイツの経済的な窮状はもはやまぎれもなかった。産業は疲弊し、環境は汚染され、洗濯物を干しても薄汚れた風で灰色になるくらい、あたりまえのことになっていた。古くからある市街地も次第に灰色に薄汚れ、郊外にはパネル住宅が粗製濫造されていった。非効率な計画経済は、安価で提供されるソヴィエト産石油や、西側からの借款に依存していた。1961 年のベルリンの壁建設以降、東独社会は、特権を持つ者や西独の金を使える者と、ますます空っぽになる店の前でますます長くなる列を作らなければならない者とに分裂した。生活は監視され、規制され、党＝国家体制によって規定された。不満はつのるばかりであった。毎夜、東独市民は西独のテレビを見て、束の間、西側への旅の気分を味わった。しかし日常生活においては忠誠が演出されていた。どの家にも旗がかかげられ、政治集会は人でいっぱいになり、大衆組織や党の会費もきちんと徴収された。まるで当局がこんな標語をかかげているかのようだった――「おまえたちはわれわれに従うふりをしろ。われわれもおまえたちを信じるふりをするから」。

東ベルリン、プレンツラウアー・ベルク、1985 年。

つのる不満

東ベリルンではベルリン＝マールツァーン（写真）、ホーエンシェーンハウゼン、ヘラースドルフという 3 つの市区が 10 年のうちに新しく作られ、およそ 9 万 1400 人が暮らすようになっていた。同じ時期、古い建築は荒廃していった。1987 年 1 月 1 日撮影。

ライプツィヒ、1989 年 9 月 2 日。見本市の時期。南国の果物はある。しかし西独貨幣でしか買うことができない。ボードに「西独貨幣のみ」と記されている。

東ドイツでは、列に並ぶのが日課のようになっていた。1987 年、イェーナで撮影。

「武器も使わずに、瓦礫の山を作り出す」。旧市街の荒廃に、東独住民は無力な皮肉で対抗した。ライプツィヒ、1989 年 9 月。

1984 年 4 月、イェンシュヴァルデの褐炭発電所。一見、のどかに見えるが実は違う。再統一後、東ドイツの水と大気の汚染には新しい汚染規制値が適用されているが、かつては EU の規制値を大幅に超過していた。

出典：Albrecht Ecke | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_0902_VER_Ges_20 | Bundesregierung/Lehnartz | Foto: Siegfried Wittenburg | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_0902_VER_Ges_04 | Bundesarchiv, Bild 183-1987-0128-310, Fotograf: Link

反政府勢力
地方選挙の不正を糾弾

1989 年 5 月 7 日、東ドイツで地方選挙が実施された。投票結果には、社会主義統一党（SED）の政策に対する住民の支持が反映される手筈になっていた。しかしこのような演出は、推理ドラマのように、西側のテレビにだけは映し出された。カメラの前で、若者たちは、SED 国家が選挙不正をおこなっている証拠を示し、市民運動グループが東独各所の何千という投票所で開票を監視していることを伝えたのである。多くの東独市民は、このときはじめて、平和・人権・環境あるいは第三世界をテーマにしたさまざまなグループが緊密なネットワークを展開していることを知った。こうしたグループは、しばしば教会の庇護のもとに、1980 年代以降、SED の政治的支配に疑問を突きつけていたのである。彼らの行動の中には、すでに注目を集めていたものもあった。しかし今、東ドイツの反政府勢力は、共同して行動できる力を示すばかりではなく、党＝国家指導部による不正を証明したのであった。当局はあらゆる非難を浴びせて反撃したが、市民運動グループが選挙不正の報告書を提出して告発するばかりでなく、公然と抗議活動をおこなうのを甘んじて見ているよりほかになかった。1989 年 6 月 4 日、北京の天安門広場における虐殺に、多くの東独市民が怒りの声をあげ、多数の人々が抗議活動に参加した。東ドイツの首都、東ベルリンでは、6 月から、毎月 7 日にデモがおこなわれるようになった。

西側ジャーナリストに唯一公開された東ベルリン第 802 投票所の開票風景。厳しい目が注がれる中、投票箱が開封された。

偽りの選挙

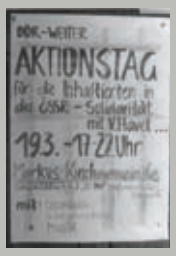
1979 年から、ベルリンのライナー・エッペルマン牧師は、東ベルリンのサマリア教会、その後は聖贖主教会で「ブルース・ミサ」を開いていた。礼拝と音楽とを結びつけた試みに、不満をいだいた若者たちが東独中から大勢詰めかけた。1986 年撮影。

1988 年 1 月 17 日、SED が主催したルクセンブルク／リープクネヒト追悼デモに、ベルリンの多数の市民運動家が参加しようとしたが、住居や路上で拘束された。写真は国家保安省に押収された腕章。「自由とは常に、他人と考えを異にする自由である」というローザ・ルクセンブルクの言葉が記されている。

ライプツィヒの市民運動グループが、独自のルクセンブルク／リープクネヒト追悼デモを呼びかけた。数百人がマルクトプラッツに集まり、旧市街を数百メートル行進したところで、警察によって「解散」させられた。

SED 機関紙『ノイエス・ドイチュラント』は、5 月 8 日、地方選挙の公式結果を発表した。東独全土の多数の投票所で開票に立ち会った反政府勢力は、独自集計と比較し、選挙不正を証明した。公式発表との食い違いが 10 パーセントに及んだところも少なくなかった。写真は、1989 年 5 月 12 日、ベルリンの市民運動グループが選挙の有効性に対する異議を訴えた文書。

1980 年代には、ロシア語で「サミズダート」と呼ばれた地下出版物が増加した。『ウムヴェルト・ブレッター』誌 1989 年 7 月号は、地方選挙の不正を報告している。表紙は、1989 年 6 月 7 日、ソフィア教会前で選挙不正に抗議するデモ隊の写真。



チェコスロバキアで拘束されていたチェコの作家ヴァーツラフ・ハヴェルのために、ライプツィヒのマルクス教会でおこなわれる抗議活動への参加を呼びかけるビラ。

出典：StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_0507_POL_Wahlen_05 | Robert-Havemann-Gesellschaft (BStU-Kopie) | Bernd Lindner, Die demokratische Revolution in der DDR 1989/90. Bundeszentrale für politische Bildung, Bonn 2001, S. 29 | ABL, Fotograf: Frank Sellentin | Robert-Havemann-Gesellschaft | ABL, Fotograf: unbekannt | StAufarb, Bestand Rainer Eppelmann, Nr. 8 und 9, (Fotograf: Jürgen Müller-Schneck)

出国現象と大量脱出

当初、公然と抗議活動をおこなう者は少数にとどまり、他の多くの者たちは、東ドイツにおける改革の希望をもはやもち続けようとはしなかった。1989 年には、10 万人以上の東独市民が、西独への旅行申請が認可されるのを待っていた。市民運動グループの例に勇気を得て、彼らも世論に訴え始め、ライプツィヒでは出国希望者がニコライ教会に殺到した。しかし 1989 年 2 月 6 日になっても、クリス・ゲフロイという 20 歳の青年が、ベルリンの壁を越えようとして射殺される事件がおきた。夏になると、ハンガリーがオーストリア国境との間の鉄条網を撤去した。最初は数百人、8 月にはおよそ 3000 人の東独人旅行者が、西への道をたどり、さらに数千人がハンガリーで脱出の機会をうかがった。9 月 11 日、ハンガリーは、国内の東独市民のために国境を開放、3 日のうちに 1 万 5000 人の東独人がオーストリアを経由して西独に入った。何千もの東独市民が、この夏、プラハ、ブダペスト、ワルシャワ、東ベルリンの西独大使館や代表部に保護を求めた。9 月末には、6000 人の東独市民がプラハの大使館で出国許可を待っていた。東ベルリンの指導部は途方にくれていた。党＝国家の指導者ホーネッカーは、SED 機関紙『ノイエス・ドイチュラント』で、「彼らとの別れを惜しんで涙を流さないでもらいたいものだ」と皮肉なコメントを発表した。

運べるだけの荷物以外は何も持たずに、1989 年 9 月 4 日、東ドイツから来た若いカップルが、ブダペスト近郊の難民キャンプ、チレボルクに到着した。

別　れ

分断されたドイツ。1978 年のヨーロッパの地図から。

東ドイツからの出国申請を提出した後、ろうそくを手にアピールする市民。1988 年 8 月、シュヴェリーン市庁舎前。

1989 年 6 月 27 日、ソプロン近郊、ハンガリー・オーストリア間の国境。オーストリア外相アロイス・モックと、ハンガリー外相ジュラ・ホルンが鉄のカーテンを撤去した。

ハンガリー通信社（MTI）、撮影：Károly Matusz。

1989 年 8 月 10 日、東ベルリン。東独警察が厳しい検問態勢をしいたにもかかわらず、西独常設代表部に脱出希望者が殺到した。あふれかえった代表部は閉鎖せざるを得なかった。

「ウィンドウショッピング」を呼びかけるライプツィヒ出国申請所のビラ。「ショーウィンドウが質量ともにいかに豊かであるかを議論しましょう」云々とある。

出典： picture-alliance/dpa | BStU, BV Schwerin, AKG 13b | Ungarische Presse- und Fotoagentur MTI, Fotograf: Károly Matusz | ABL, 20-11-88 | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_0810_Ausreise_04 | Landesarchiv Berlin, Kartenabt., Zustand: 1978, Kartographie/Verlag: dtv-Perthes Weltatlas

市民運動の結成

東ドイツが、壁建設以後最大の脱出現象に見舞われ、社会主義統一党（SED）政権の改革能力の欠如が露呈していたころ、市民運動グループが次々に生まれて、人々を吸収していった。すでに 1989 年 7 月、社会民主党創設が宣言され、9 月には「出発 89」と題する決議文をかかげて「新フォーラム」が発足した。ほかにも「今こそ民主主義を」「民主主義的出発」を名乗るグループが結成され、いずれも世論に訴えかけて、SED の支配を受けない政治勢力を形成していった。この状況で、西側メディアも東独メディアも、ドイツの東西で反政府勢力の声を伝えて、大きな役割を果たした。9 月 4 日、ライプツィヒ月曜デモが始まった。1000 人の市民運動家と出国希望者が、ニコライ教会で毎週おこなわれていた「平和の祈り」のあと、教会前で「開かれた国と自由な人間」を求めてデモをおこなったのである。1 週間後のデモでは、人民警察は 89 人のデモ参加者を拘束し、うち 19 人が禁固刑に処せられた。国中で礼拝がおこなわれ、東独市民はとらわれた人々と連帯した。怒りが広がり、ますます多くの場所でデモがおこなわれた。出国希望者たちは「われわれは外に出たい!」と叫んでいたが、ライプツィヒでは「われわれはここにとどまる!」という叫びが生まれた。

ライプツィヒ、1989 年 9 月 4 日。月曜デモの始まり。居合わせた多くの西側ジャーナリストが、これを広く伝えた。町は、誰の目にも開かれた政治活動の場となった。

出　発

ベルリン近郊グリューンハイデのカティア・ハーヴェマンの家で、1989 年 9 月 9/10 日、「新フォーラム」が結成された。写真は創設メンバー。（左から）ベアベル・ボーライ、ユタ・ザイデル、カティア・ハーヴェマン。

マルクス・メッケルとマルティン・グートツァイトは、1989 年 7 月 24 日、東独社会民主党の結成声明を起草、8 月 26 日に公表した。政党結成は、1989 年 10 月 7 日、ベルリン北方の小都市シュヴァンテ。写真は、この日、この地で撮影したもの。

未来のためのワークショップ「東ドイツはこれからどうなるのか?」、1989 年 10 月 6 日、東ベルリン聖贖主教会にて。新しい市民グループが多数集まり、共同声明で、東ドイツにおける人権擁護を要求した。

東ドイツで反政府勢力がさらに形成されていく中、ニュースでは、大量脱出現象を伝える新しい映像が流れていた。9 月 10 日から 11 日にかけての夜、ハンガリー政府がオーストリアとの間の国境を開放、数週間のうちに、数万人の東独市民がオーストリア経由で西独に入った。

撮影：Barnabás Szabó

チェコスロバキアの態度は当初、厳しかった。プラハでは、6000 人の脱出者が、西独大使館の敷地で、9 月末まで出国を待っていた。1989 年 9 月 30 日、プラハで撮影。

出典： ABL, Fotograf: Rainer Kühn | Privatarchiv Steffen Reiche | Fotograf: Barnabás Szabó | Bundesregierung/Seebode | Robert-Havemann-Gesellschaft (BStU-Kopie) | Foto: Hanno Schmidt/Robert-Havemann-Gesellschaft

党＝国家指導部
東独建国 40 周年を演出

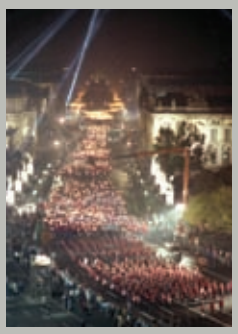
国内の展開には気にもとめないかのように、党＝国家指導部は、1989 年 10 月 7 日の東独建国 40 周年式典の準備を進めた。祝賀気分を妨げるものがあってはならなかった。ワルシャワとプラハの西独大使館に人々が殺到している映像など、もってのほかであった。そのため東独指導部は、9 月末、プラハの大使館につめかけていた 6000 人に対し、東独領内を経由する特別列車を手段とすることを条件に、出国を認めた。東独領内通過を出国条件としたのは、国家の主権を誇示するためであったが、結果として事態をさらに悪化させることとなった。10 月 4 日、列車への同乗を求めて、3000 人の出国希望者がドレスデン中央駅につめかけ、警官隊と衝突したのである。不穏な状態は一日では終わらなかった。10 月 7 日、社会主義統一党政府は、行進や軍事パレード、共和国宮殿における式典を実施して、権力を誇示する奇怪な芝居を演じた。しかし抵抗運動の押さえ込みに失敗したのも、まさにこの日であった。東ベルリンで平和的にデモをしていた数千の市民に、人民警察が棍棒をふるって襲いかかったのである。ちょうどその時刻、共和国宮殿には、世界中から、共産主義をかかげる国家や党の指導者たちが集まっていた。その中にはソ連のミハイル・ゴルバチョフもいた。彼は、ベルリンに到着したとき、同志たちの記念帳に次のように書き込んでいた ――「時宜を逸する者は、命をもって贖うことになる」。

東独建国 40 周年。10 月 7 日、軍隊と旗を振る市民が、党＝国家指導部の前をパレードした。しかしこれが最後の建国記念式典であった。

自己欺瞞

1989 年 10 月 5 日、プラハの西独大使館に身を寄せていた 650 人が、西独の小村アルスフェルトの駅に到着、あたたかい歓迎を受けた。

1989 年 10 月 6 日、ミハイル・ゴルバチョフは、ベルリン＝シェーネフェルト空港で、エーリヒ・ホーネッカーに迎えられた。このときすでにゴルバチョフが発していた警告「時宜を逸する者は、命をもって贖うことになる」は、少なくとも当を得たものではあっただろう。



国家による青年組織「自由ドイツ青年団」は、1989 年 10 月 6 日、東独建国 40 周年の前夜祭として、東ベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデンをたいまつをかかげて行進した。

10 月 7 日夜、思想の自由と民主主義を求めて、数千の人々が東ベルリンでデモ行進、人民警察は棍棒をふるってこれにこたえた。写真は、ディミトロフ通り（今日のダンツィヒ通り）とプレンツラウアー通りの交差点におけるデモ隊への介入。

抗議活動がおこなわれたのは首都だけではなかった。東独東南部フォークトラントの中心都市プラウエンでは、10 月 7 日、国家権力は放水によってデモ隊を鎮圧した。

出典：Bundesarchiv, Bild 183-1989-1007-402, Fotograf: Franke | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1006-410, Fotograf: Schindler | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0924-010, Fotograf: Roeske | Robert-Havemann-Gesellschaft (BStU-Kopie) | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1006-439, Fotograf: Roeske | StAufarb, Bestand Uwe Gerig, Nr. 3963

10月9日、ライプツィヒの月曜デモ 平和裏に遂行

国家式典後の月曜日、ライプツィヒは耐えがたい緊張に包まれていた。月曜デモの参加者は週を追うごとに増えていた。しかし、式典が終了した今、社会主義統一党（SED）はデモ隊を暴力的に踏みにじることを厭わないのではないだろうか？　町の周辺では、軍用車が配置についていた。学校や会社では、夜間、市の中心部に近づかないよう警告が出された。病院では、流血の事態に備えて医師たちが待機していた。17時、ライプツィヒ中心街の商店は店を閉めた。そして夜。いかなる脅しにも屈することなく、男も女も町に出て、ニコライ教会やカール・マルクス広場に集まった。その数7万人、これほどの人数になるとは誰も、制圧部隊ですら、予想していなかった。やがて人々は行進を始め、デモ隊ははじめて中心街を埋めつくした。「われわれこそが国民だ!」「暴力をふるうな!」ライプツィヒ中心街にスローガンが響いた。東ベルリンの指導部も、ライプツィヒのSED幹部も鎮圧命令を出せないまま、18時25分、人民警察の司令官は武装部隊の撤退を命じた。恐怖を乗り越えた7万の無名の英雄たちの姿は、当夜のうちに、ニュース映像として全ドイツの茶の間に流れた。東独に平和革命が起きたのである。

1989年10月9日。ライプツィヒのリング通りで7万人がデモ。トレンドリン・リングの歩道橋から撮影。

決　意

1989年9月4日から、ライプツィヒでは月曜日の夜には必ずデモがおこなわれた。警察は、大量に出動して厳しく対処した。写真は、ニコライ通りからグリマイ通り方面を封鎖する治安部隊。1989年9月18日。

9月25日月曜日。ニコライ教会における平和の祈りの後、5000人のライプツィヒ市民がリング通りをデモ。意外なことに、警察は背後に退いていた。しかしトレンドリン・リングの歩道橋でデモ隊は引き返した。その先の「ルンデ・エッケ」には、東独の秘密警察である国家保安省（シュタージ）のライプツィヒ本部があった。そこを通っていいのかどうか、彼らはまだためらっていたのである。

撮影：Johannes Beleites

ライプツィヒの市民運動グループが、鎮圧部隊に対し、平和的デモに対して暴力を用いないことを要求した文書。1989年10月9日。

党＝国家権力は、町の不安を煽った。警察機動隊の司令官は、治安部隊は必ずや武力で対抗する、と新聞に投書した。『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』紙1989年10月6日の紙面から。

Staatsfeindlichkeit nicht länger dulden

いかなる脅しにも、恐怖を煽る流言にも屈せず、10月9日夜、かつてない大勢の人々が町に出て、ニコライ教会やカール・マルクス広場（今日のアウグストゥス広場）に集まった。

7万人の市民がデモの隊列を組んだ。治安部隊は麻痺し、鎮圧命令は下されなかった。この日はじめて、デモ隊はリング通りを一周し、国家保安省（シュタージ）前を行進した。10月9日、東独に平和革命が起きたのである。写真は、ゲオルギ・リングのライプツィヒ歌劇場、中央駅方面。

出典：Museum in der „Runden Ecke“, Fotograf: Uwe Pullwitt | Foto: Johannes Beleites | Leipziger Volkszeitung, 6. Oktober 1989 | Museum in der „Runden Ecke“, Fotograf: Heinz Löster | Museum in der „Runden Ecke“, Fotograf: Martin Naumann | ABL | ABL, Fotograf: Rainer Kühn

社会主義統一党
権力に固執

9 日間にわたって、ドイツ全土で、プラウエン、ドレスデン、カール・マルクス・シュタット、ハレ、その他、多くの小さな町や村で、デモ参加者の数は増え続けた。社会主義統一党（SED）も、ついに目に見える対応をとらざるを得なくなった。1989 年 10 月 18 日、党＝国家の指導者、エーリヒ・ホーネッカーがすべての職を辞したのである。後を継いだのは、エゴン・クレンツ。彼が勇気を奮い起こして他の政治局員とともにホーネッカー退陣の手筈を整えたのは、ようやく 2 日前のことであった。モスクワの意向を伺うと、ゴルバチョフは「幸運を祈る」と述べ、この問題は SED 自身が決めることだと言明した。党首としてはじめてテレビ会見に臨んだクレンツは、政治の「転換」を宣言した。対話と改革によって、SED による支配を守ろうとしたのである。しかし人々は、すでに長年にわたってホーネッカーの後継者とみなされ、また夏には北京の天安門事件を正当化する発言をしていたクレンツを信用しなかった。国家＝党の指導部は、あわただしく改革を試みた。東独経済は支払い不能の危機に瀕していたが、西独の財政支援は、政治改革の進展を条件としていたのである。デモの圧力は一貫して大きくなり続けた。11 月 4 日、東ベルリンのアレクサンダー広場でデモをおこなった人々は 50 万人を越えていた。11 月 7 日、閣僚は総辞職、翌日には SED 政治局も全員が辞任した。新しい旅行法の第 1 原案が作成されたが、この原案は例外だらけであり、ライプツィヒでは 50 万人が町に出て抗議活動をおこなった。

エゴン・クレンツと彼の転換政策は、信用されなかった。横断幕には「国民が自ら選ぶ！　エゴンはごめんだ！」とある。（写真：ライプツィヒ、1989 年 11 月 6 日）

転　換

エーリヒ・ホーネッカー退陣を受けて、エゴン・クレンツが後を継ぎ、1989 年 10 月 24 日、東独国家元首の座に就いた。

人々は、SED 指導部が対話提案を真剣に考えているとは思わなかった。この数日、あるいは数週間の経験が、骨身に沁みていたのである。写真は、1989 年 10 月、多くの者を代弁して、ライプツィヒのある市民がニコライ教会にかかげた意見書。過去の数々の弾圧の具体例をあげて、対話への不信を表明している。

1989 年 10 月 23 日、反政府勢力の代表たちが記者会見を開き（着座、左からエーアハルト・ノイベルト、不詳、マリアンネ・ビルトラー、ヴェルナー・フィッシャー、クリストフ・ジンゲルシュタイン）、10 月 7/8 日の警察による残虐行為の記録など、およそ 100 ページにわたる文章を発表した。マイクを持って立っているのは、嫌疑を調査することを約束する東独司法長官代行クラウス・フォス。

1989 年 11 月 4 日、東独史上最大のデモ。参加者は 50 万人を超えた。このデモは東独のテレビ局で生中継された。

1989 年 11 月 4 日、ベルリンの共和国宮殿脇を通るデモ隊がかかげた横断幕。「ひとたび嘘をつく者は、嘘と縁を切らない限り、誰も信用しない」とある。

出典：Bundesregierung/Liebe | ABL, Fotograf: Frank Sellentin | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_1104_POL-Demo_44 | StAufarb, Bestand Klaus Mehner, Nr. 89_1104_POL-Demo_27 | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1023-019, Fotograf: Settnik | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1024-027, Fotograf: Mittelstädt

11 月 9 日の夜は世界を変えた

1989 年 11 月 9 日木曜日 20 時。テレビニュース番組「ターゲスシャウ」のオープニングテーマが流れると、ドイツの人々はテレビの前に釘付けになった。トップニュースは「東ドイツ、国境を開く」であった。テレビには社会主義統一党（SED）政治局員のギュンター・シャボフスキーが映っていた。彼はこの夜、SED の記者会見で、新しい旅行規則について説明していた。新しい規則では、西側への旅行が「前提条件なしに」許可されるという。いつ発効するのかと問われたシャボウスキーは、「即時」と答えた。ターゲスシャウは「壁は一夜にして通行可能となる」とコメントした。東ベルリンのいたるところで、男も女も、ジャケットやコートに身を包み、おずおずと、半信半疑で、国境検問所を目指した。ボルンホルム通りの検問所には、最初数百人、23 時頃には 2 万人近い人々が押し寄せた。「門を開けろ！　門を開けろ！」、「われわれはまたやって来る！　われわれはまたやって来る！」と人々は叫んだ。30 分後、国境検問所は押し寄せる人々に抗しきれず、遮断棒を上げた。やがて、ベルリンのほかの国境検問所や、東西ドイツ国境のほかの場所でも、障壁は排除された。インヴァリーデ通りの国境検問所では、数千の西ベルリン市民が開放を要求した。ベルリン各所で、人々は笑いながら、あるいは幸せのあまり涙を流しながら抱き合った。ベルリンの壁、この分断のシンボルが、ついに崩壊したのである。

東西数万のベルリン市民が、ブランデンブルク門のベルリンの壁の上で出会った。撮影は 1989 年 11 月 10 日から 11 日にかけての夜。

壁の崩壊

ギュンター・シャボフスキーは、1989 年 11 月 9 日、生中継された記者会見で、新しい旅行法を発表した。この規則はいつ発効するのかと、あるイタリア人ジャーナリストが問うと、シャボフスキーは「即時。遅滞なくだ」と、幾分おぼつかない調子で答えた。

過大な仕事を抱え込んだ国境警備隊や税関職員が、インヴァリーデ通りの国境検問所で、夜に国境を行き交う人々をそれでもチェックしようと試みている。

1989 年 11 月 9 日から 10 日かけての夜、東ドイツから、西ベルリンの目抜き通りクアフュルステンダムにやってきたドライバーを、西ベルリン市民は歓呼の声をあげて迎えた。

28 年の歳月を経て、壁は崩壊した。インヴァリーデ通りの国境検問所で、東西のベルリン市民が抱き合う。

何千もの東独市民が、翌日、全土で西への旅にでかけた。東西ドイツ間の国境検問所では、長い渋滞が生じた。

出典：StAufarb, Bestand Uwe Gerig, Nr. 4591 | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1110-020, Fotograf: Altwein | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1110-038, Fotograf: Ludwig | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1109-030, Fotograf: Lehmann

ドイツ問題

壁の崩壊によって、ドイツ問題は思いがけない形で世界政治の日程にのぼることとなった。壁崩壊の日、「本来一体であるものが、今、ひとつに合わさったのだ」と、ヴィリー・ブラントはコメントした。1989 年 11 月 28 日、西独首相ヘルムート・コールは、「10 項目提案」をおこなった。そこでは、ドイツ統一が、国家連合の形で、今後 5 年から 10 年かけて達成されることを想定していた。しかしポーランドは、東独との間では確定していた西方国境を西独がいまだ承認していなかったため、東西ドイツの統一によって国境の有効性が否定されるのではないか、と不安を抱いた。イギリスとフランスは、ドイツが新たな大国となることを恐れた。ソ連は、ナチス・ドイツとの戦争で得た成果を失ってしまうと考えた。激励の声は、ワシントンからしか聞こえてこなかった。東西両ドイツの国内でも、なかんずく知識人が、早急な統一への見通しを拒否した。たとえば、「10 項目提案」と同じ 11 月 28 日に、「われらの国のために」と題するアピールが発表されたが、そこでは東ドイツにおいて「西ドイツとは異なる社会主義国家」を発展させることがうたわれていた。しかし東ドイツの人々はもうこれ以上、実験を望んでいなかった。デモにおいては、かつての「われわれこそが国民だ!」という叫びから転じて、今では「われわれはひとつの国民だ!」というスローガンが叫ばれた。12 月 19 日、西独首相ヘルムート・コールは、11 月に東独首相に就任したハンス・モドロウとともに、ドレスデンを訪れて演説をおこなった。出迎えたのは、数万の人々と、一面の「ドイツの旗」の海であった。

シェーネベルクの市庁舎前で、壁崩壊翌日におこなわれた政治集会（左から、元西独首相ヴィリー・ブラント、西ベルリン市長ヴァルター・モンパー、西独首相ヘルムート・コール）。

さまざまな視点

ドイツ統一に反対する人々も、デモ隊の中に確かにいたが、少数派であった。プラカードには「大ドイツ? NO !」と見える。1989 年 12 月 4 日ライプツィヒで撮影。

東独市民の大多数は分断の終結を願った。1989 年 12 月 11 日、ライプツィヒのアウグストゥス広場の大規模デモ。「ドイツ、統一、祖国」など、統一を求める横断幕が見える。

1989 年 12 月 19 日、聖母教会前の政治集会で、数千のドレスデン市民は一面に「ドイツの旗」をかかげて西独首相ヘルムート・コールに歓声をあげた。

フランス大統領フランソワ・ミッテランは、急遽、東ベルリンを訪問した。これはドイツ再統一に反対するシグナルと評価された。ミッテランを迎えるのはマンフレート・ゲルラッハ。彼は、社会主義統一党（SED）のコントロールを 1989 年秋まで受けていた小政党・自由民主党（LDPD）の党首を長年務めており、12 月 6 日に東独国家元首に就任していた。

西独首相ヘルムート・コール（左）と東独首相ハンス・モドロウ（マイク）は、1989 年 12 月 22 日、ブランデンブルク門の新しい徒歩通路の竣工をともに祝った。

出典：Bundesregierung/Lehnartz | ABL, Fotograf: Karl Heinz Müller | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1220-037, Fotograf: Altwein | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1204-036, Fotograf: Gahlbeck

市民運動グループ 東独民主化を推進

壁の開放は、社会主義統一党（SED）の権力崩壊を早めた。党の幹部は次々に退陣し、何万もの党員がSEDを離れた。東独キリスト教民主同盟（CDU）や自由民主党（LDPD）など、従来はSEDの支配下にあった小政党も独立した活動を開始した。1989年12月1日、SEDの指導をうたう文言が、東独憲法から削除された。12月8/9日、SEDは「民主社会党」（PDS）と改名、まだ救い得るものを救い出そうと懸命であった。経済状況と物資の供給は逼迫していた。38万のソ連軍はいまだ国内に駐留し、SED党員はいまだ国家機構と武装組織の要衝を占めていた。しかし力を持っていたのは町に出た市民たちであった。一歩々々、市民運動グループは主導権を握る試みを重ねた。11月22日、反政府勢力は東ベルリンに「中央円卓会議」を開設し、新旧の政治勢力の代表者を集めた。反政府勢力の主たる関心は、自由選挙と、民主主義的憲法と、秘密警察の解体にあった。この年のうちには、多くの分野で「円卓会議」が権力機構と行政の業務を担うようになった。そして、1990年2月5日には、在野の反政府勢力の代表者8人が、無任所大臣としてモドロウ政権に加わったのである。

1990年1月22日、東ベルリンのシェーンハウゼン宮殿で開催された円卓会議。

民主化への道

復帰コンサートがついに実現――1976年に市民権を剥奪された詩人・シンガーソングライターのヴォルフ・ビーアマンが、ふたたび東ドイツの舞台に登場した。ライプツィヒでは、1989年12月1日、5000人が歓声をあげた。

SEDの権力は揺らいでいた。しかし、1989年12月8/9日の臨時党大会（写真）は、それでもなお力を誇示するものとなった。新しい政党やグループの中には、1989年から90年にかけての時期、SEDに匹敵する党員数を誇るものもなければ、機能する組織構造を有するものもなかったのである。

シェーンハウゼン宮殿における第8回円卓会議。1列目左から：イングリット・ケッペ、ロルフ・ヘンドリヒ（新フォーラム）、コンラート・ヴァイス、ヴォルフガング・ウルマン（今こそ民主主義を）、ダンクヴァルト・ブリンクスマイアー、イブラヒム・ベーメ（社会民主党）、トーマス・クライン、ジルヴィア・ミュラー（連合左派）、マリオン・テップファー、ブリギッテ・デーリング（自由ドイツ労働組合同盟）。

1994年夏、ベルリン、リヒテンベルク駅。ドイツから撤退するロシア人兵士たち。つまり平和革命の時点ではまだ、重武装したソ連軍が東独領内に駐留していたわけである。

1990年2月5日、人民議会は東独政府の閣僚に野党の代表8名を加えることに同意した。彼らは無任所大臣としてモドロウ政府の仕事をチェックすることとなった。左から：ゼバスティアン・ブフルークバイル（新フォーラム）、ライナー・エッペルマン（民主主義的出発）、ヴァルター・ロンベルク（社会民主党）、タチヤーナ・ベーム（独立婦人同盟）、クラウス・シュリューター（緑の連盟）、マティアス・プラツェク（緑の党）、ゲルト・ポッペ（平和と人権イニシアチブ）、ヴォルフガング・ウルマン（今こそ民主主義を）。

出典：Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1208-041, Fotograf: Mittelstädt | Bundesregierung/Faßbender | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0205-019, Fotograf: Senft | Landesarchiv Berlin/Ingeborg Lommatzsch | Bundesarchiv, Bild 183-1989-1201-047, Fotograf: Grubitzsch (geb. Raphael)

国家保安省解体
秘密文書が開示される

東ベルリン、ノルマネン通りの国家保安省本部に市民が突入、これを占拠した。1990 年 1 月 15 日のことである。国家保安省の権力の終焉が、誰の目にも明らかになった日であった。「党の盾と剣」を自認した秘密警察は、これに先立つ数週間で、麻痺の度合いを強めていた。まだ 1989 年 10 月には、正規の情報部員 9 万人、非公式協力者約 17 万 4000 人を数える巨大組織であったが、11 月 13 日、長年にわたって国家保安大臣を務めていたエーリヒ・ミールケが人民議会に姿を見せ、明らかに狼狽した様子で、それでも政治的延命をはかろうとして「わたしは万人を愛している」と演説したとき、シュタージの権威は著しく失墜した。モドロウ政権は、国家保安省（MfS）を「国家保安局」（AfNS）と改称して生き残らせようとしたが、国家保安省の呼称シュタージに合わせて、この国家保安局もナージと呼ばれた。12 月初めになると、このナージが大量の書類を廃棄していると相次いで報告された。市民運動グループは、12 月 4 日にエアフルトで、やがて他の都市でも、秘密警察本部を占拠した。12 月 9 日、秘密警察のゲラ地方当局は、占拠を甘受しない、という声明を出したが、相手にされなかった。1990 年 1 月 11 日、ハンス・モドロウは、「円卓会議」の圧力で、シュタージを改名して存続させるのをあきらめた。市民が、シュタージの権力に打ち勝ち、シュタージの文書を手にしたのである。シュタージ文書の開示は、社会主義統一党による独裁体制の検証に必要不可欠である。

東ベルリン、ノルマネン通り、東独国家保安省。1974 年撮影。

権力の終焉

国家保安大臣辞任後まもなく、1989 年 11 月 13 日、エーリヒ・ミールケは人民議会に姿を見せた。彼が人民議会に登壇したのはこれが最後となった。しかし彼はこのとき、明らかに狼狽していた。

1990 年 1 月 15 日、10 万人以上がノルマネン通りのシュタージ本部前をデモ、ついに本部を占拠するにいたった。

1990 年 1 月、解放を要求するバウツェン第 1 監獄の囚人たち。横断幕をかかげて、自分たちは脱走や「不法出国」（東独刑法第 213 条）を理由に逮捕されたに過ぎない、と訴えている。

1990 年 3 月、武装解除を監視するエアフルトの円卓会議のメンバー。解散した武装組織が持っていた機関銃は解体され、その後、警察の護衛のもと、溶解炉に運ばれた。

出典：StAufarb, Bestand Klaus Mehner. Nr. 74_0426_DDR-MfS-DG_04 | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0115-029, Fotograf: Uhlemann | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0315-302, Fotograf: Hirndorf | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0123-048, Fotograf: Häßler | Foto: BStU, NDR/Glaser

3 月 18 日、人民議会選挙
東独平和革命が勝利をおさめる

1990 年 3 月 18 日日曜日、投票が締め切られ、第 1 回の最終得票予想が出ると、早くもセンセーションが巻き起こった。東独人民議会選挙史上、最初で最後の自由選挙で、東独キリスト教民主同盟（CDU）と民主主義的出発（DA）とドイツ社会同盟（DSU）からなる「ドイツのための同盟」が 48 パーセントの票を獲得したのである。市民運動の政党や連合は、すべて合わせても 27 パーセントの得票に過ぎず、そのうち、数週間前には勝利が確実視されていた東独社会民主党（SPD）の得票率は 22 パーセントにも達しなかった。自由民主連合は 5 パーセント。SED を後継する民主社会党に相変わらず投票した人も 6 人に 1 人いた。選挙の争点となったのは、ドイツ統一に対する各政党の姿勢であった。社会民主党も、市民運動を母体とする各種選挙連合も、再統一に賛成を表明していたことに変わりはない。しかし再統一への道をもっとも直接に進むことを計画していたのは「ドイツのための同盟」であった。さらに重要であったのは、「同盟」が、他の政党や連合とは異なり、コール首相（西独 CDU）の率いる西独政権の支持を主張できたことであった。多くの東独市民は、コール政権からの迅速な物質的支援を期待したのである。1990 年 4 月 12 日、「同盟」と社会民主党と自由民主連合による大連立政府がロータル・デ・メジエール（CDU）を首相として発足した。こうして人民議会選挙が自由選挙としておこなわれ、政府と野党が民主的に選ばれた —— 平和革命がついに勝利をおさめたのである。

東ドイツの選挙戦。

勝　利

1990 年 1 月 27/28 日、「新フォーラム」の公式設立会議がベルリンで開催された。しかし政党として活動するべきかどうかについては、執行部の意見はわかれていた。写真は、イェンス・ライヒ（起立）、イングリット・ケッペ（右）、ラインハルト・シュルト（前方に着座）。

選挙 4 日前、ライプツィヒのカール・マルクス広場（現アウグストゥス広場）でおこなわれた「ドイツのための同盟」の選挙集会で演説する西独首相ヘルムート・コール。

西独の元首相で東西のドイツ社会民主党名誉党首ヴィリー・ブラントは、ヴィスマールのマルクトプラッツで、人民議会選挙 2 日前、3 万人を前にして演説をおこなった。

「ドイツのための同盟」は、自由民主連合および社会民主党と、次期政権のために連立協議をおこなった。写真は（左から）ライナー・オルトレーブ（自由民主連合）、ペーター＝ミヒャエル・ディーステル（ドイツ社会同盟）、リヒャルト・シュレーダー（社会民主党）、ロータル・デ・メジエール（キリスト教民主同盟）、ライナー・エッペルマン（民主主義的出発）。

STIMMZETTEL / WAHLKREIS 1

(Listen in alphabetischer Reihenfolge)
zur Wahl der Volkskammer der Deutschen Demokratischen Republik
am 18. März 1990
(Auf dem Stimmzettel nur eine Liste im Kreis kennzeichnen)

Liste			
1	Aktionsbündnis Vereinigte Linke (AVL) Die Nelken – VL	Klein, Thomas (VL) Cuntze, Michael (Die Nelken) Brüsewitz, Jutta (VL)	1
2	Alternative Jugendliste (AJL) DJP – DJ – MJV – FDJ	Pöhlau, Heike (FDJ) Kaemer, Thomas (FDJ) Zillich, Steffen (MJV)	2
3	„Bündnis 90" NEUES FORUM – DEMOKRATIE JETZT – IFM	Prof. Dr. Reich, Jens (NEUES FORUM) Bröthos, Marianne (IFM) Dr. Fischbeck, Hans-Jürgen (DEMOKRATIE JETZT)	3
4	Bund Freier Demokraten DFP – LDP – F.D.P. Die Liberalen	Thiele, Peter (F.D.P.) Prof. Dr. Carls, Wolf-Rainer (LDP) Dr. Klein, Reinhard (LDP)	4
5	Bund Sozialistischer Arbeiter (BSA) Deutsche Sektion der 4. Internationale	Pärnau, Hildegard Franken, Rudolf	5
6	Christlich-Demokratische Union Deutschlands (CDU)	de Maizière, Lothar Dr. Bergmann-Pohl, Sabine Dr. Weiler, E. Hinrich	6
8	Demokratische Bauernpartei Deutschlands (DBD)	Dr. Sturhberg, Uwe Drews, Roland Dr. Sermann, Rainer	8
9	„Demokratischer Aufbruch – sozial + ökologisch" (DA)	Eppelmann, Rainer Apelt, Andreas Hahn, Michael	9
12	Deutsche Soziale Union (DSU)	Dr. Schnirale, Joachim Kristiel, Beate Dr. Angerstein, Wilfried	12
13	„EINHEIT jetzt"	Uhlig, Gerda Stutz, Helge Stutz, Heinz	13
14	Europäische Föderalistische Partei Europa Partei (EFP)	Wendt, Horst	14
16	„Grüne Partei + Unabhängiger Frauenverband" (Grüne – UFV)	Wollenberger, Vera (Grüne) Schenk, Christine (UFV) Kuhn, Wolfrad (Grüne)	16
17	Kommunistische Partei Deutschlands (KPD)	Pscharfe, Horst Jacobs, Reinhard Christmann, Christoph	17
18	National-Demokratische Partei Deutschlands (NDPD)	Hartmann, Günter Blauert, Hans-Joachim Nahuf, Hans-Jürgen	18
19	Partei des Demokratischen Sozialismus (PDS)	Dr. Gysi, Gregor Dr. Kaufmann, Sylvia-Yvonne Dr. Seifert, Ilja	19
20	Sozialdemokratische Partei Deutschlands (SPD)	Böhme, Ibrahim Manfred Knoll, Ute Krüger, Thomas	20
21	Spartakist-Arbeiterpartei Deutschlands (SpAD)	Endruweit, Torsten Otto, Hans-Dieter Friedrich, Holger	21
23	Unabhängige Volkspartei (UVP)	Kaebe, Joachim	23
24	Vereinigung der Arbeitskreise für Arbeitnehmerpolitik und Demokratie (VAA)	Hillmann, Lutz Helm, Maik	24

Muster

1990 年 3 月 18 日、東独人民議会の最初で最後の自由選挙が実施された。写真はベルリン第 1 区の投票用紙。

出典：Bundesarchiv, Bild 183-1990-0115-029, Fotograf: Häßler | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0312-021 | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0403-028, Fotograf: Bauer | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0316-035, Fotograf: Sindermann | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0128-012, Fotograf: Reiche

「通貨と経済と社会の統合」西独貨幣が東に流入

デ・メジエール政権は、他に例をみない課題に直面していた。東独の西独への編入を可能な限りすみやかに責任をもって実現すること、そのために必要な政治改革を推進すること、経済状況、特に東独における物資の供給を安定させること、統一に必要な両ドイツ間の条約や国際条約の締結に向けた協議を西独と協力して実施すること――これが選挙結果にあらわれた選挙民の願いであった。東西どちらのドイツ政府も、早急な行動を迫られていた。毎日 2000 人の東独市民が、トランクに荷物をつめて西を目指していたからである。東の国境のほころびがもはやつくろい難くなった 1989 年夏以降、移住者は 55 万人以上にのぼり、とうに西独の受け入れ能力の限界を越えていた。町で人々は叫んでいた。「西独マルクがやって来るなら、われわれはとどまろう。来ないなら、われわれの方から出向いていくぞ!」 1990 年 7 月 1 日、すでに 5 月 18 日に調印されていた条約に基づいて「通貨と経済と社会の統合」が発効した。一夜にして、西独通貨とともに、市場経済が、エルベ川からオーダー川まで東独全域に公式に入り込んだ。東独国有財産は、すでにモロドウ政権時代に決定されていた通り、信託公社によって民営化が進められた。

通貨統合の翌日、全土で、銀行の前に長い列ができた。写真は東ベルリン、アレクサンダー広場。

同　化

1990 年 5 月 18 日、西独財務相テオ・ヴァイゲル（右）と東独財務相ヴァルター・ロンベルク（左）は、「通貨と経済と社会の統合に関する条約」に調印した。写真後列に立っているのは（左から）東独首相ロータル・デ・メジエールと西独首相ヘルムート・コール。

すでに 1990 年春から、マイニンゲンの店のショーウィンドウには、西側の食料品が並べられていた。東独製品への需要は急速に減退した。

すでに通貨統合以前から、東ドイツの市場でも西側製品があふれていた。写真は、アルテンブルクのマルクトプラッツ。1990 年 6 月 18 日。

東ベルリン、アレクサンダー広場の中央百貨店に西側製品が入ったのは、通貨統合の後であった。1990 年 7 月 1 日撮影。

1990 年 3 月 1 日、モドロウ政権は「人民財産信託管理公社」を設立した。写真は 4 年後、東独国営企業の民営化が終了した 1994 年 12 月 30 日、取り外した職場のプレートをカメラに向けるブリギット・ブロイエル総裁。

出典：Bundesregierung/Lehnartz | StAufarb, Bestand Uwe Gerig, Nr. 2608 | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Kühler | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Schambeck

1990 年
探索と支援の年

1990 年春、東独市民の 85 パーセントが再統一に賛成していた。西独においては 1 月時点で 70 パーセントであった。東でも西でも、人々はもう片方のドイツを探索に出かけた。再会への好奇心も、その喜びも大きかった。壁崩壊後、東独市民が西側を訪れやすくするために、100 マルクの歓迎金が支払われた。しかし連帯をあらわしていたのはそれだけではない。連邦州も自治体も、政党も団体も連盟も、そして一人々々の人たちも、互いに協力を惜しまなかった。教会は全ドイツで連帯し、民主的改革や経済復興を資金・人員・知識の面で支援した。「態度のでかい西独人」「嘆いてばかりの東独人」などという言葉はまだ生まれていなかった。警告や疑念の声も確かにあったが、多くの人々は「薔薇色の光景」がすぐにも見られると期待していた。多くの東独市民が長年の夢を実現し、シャンゼリゼやマジョルカ島で東独ザクセン訛りのドイツ語が聞かれるようになった。東独市民も車を買い求めて、西ドイツの中古車市場は売り切れになった。一時の高揚感の中では、キュウリやマスタードや小麦ですら、地元の産物よりも西独産の方がおいしく感じられた。やがて旧東独が懐かしく感じられることがあるなどとは、この時点では考えもつかなかったのである。

1989 年 11 月 11 日、ヘルムシュテットの国境検問所。

連　帯

壁崩壊後、ついに東独市民の目が世界に向けられるようになった。西ヨーロッパ各国の首都ばかりでなく、東洋も選択肢に加わった。写真は、1990年3月31日、ハイリゲンシュタットのショーウィンドウ。バリ島旅行の広告が見える。

検車台上のトラバント（1990 年 6 月 20 日、ヴァイマールで撮影）。東ドイツを代表する自動車であったが、注文から購入まで、何年も待たされるのがあたりまえであった。壁崩壊後、西ドイツの中古車は、またたく間に売り切れた。

ブランデンブルク門からライプツィヒ広場にかけて、かつては「死の境界線」と呼ばれた場所に、1990 年 6 月 21 日、ヨーロッパ中から、世界中から、30 万人がつめかけた。元ピンク・フロイドのリーダー、ロジャー・ウォーターズのロック・オペラ「ザ・ウォール」が、新演出で上演された。

商人にとっても、もはや壁という妨げはなくなった。パンコウの市場で果物を売るトルコ人。1990 年 7 月 25 日。

ベルリン中で壁は解体され、壁のかけらは、再び一体となった町の観光土産となった。写真は、ベルリン・クロイツベルクのケーペニク通りに残った壁。

出典：Bundesregierung/Specht | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0725-300, Fotograf: Franke | Bundesregierung/Reineke | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0722-402, Fotograf: Roeske | StAufarb, Bestand Uwe Gerig, Nr. 2500

第 2 次大戦の戦勝国
ドイツ再統一に同意

1990 年半ばの時点では、ドイツ統一のための基本的な基盤はまだ欠如していた。統一のためには、第 2 次世界大戦の戦勝国の同意が必要であった。戦勝国は、ドイツに関する権利と責任を、全体としては決して放棄していなかったのである。両ドイツ国家は、対立する 2 つの陣営にそれぞれ属していたばかりではない。両国の領内には、依然として、連合軍の大部隊が駐留していた。そればかりでなく、隣接する各国が抱く安全保障に対する関心を考慮することも重要であった。こうした問題を協議するため、1990 年 5 月、東西ドイツと米ソ英仏の外相による 2+4 交渉が始まった。6 月 21 日、両ドイツ議会はそれぞれポーランドの西方国境の不可侵をうたう同文の決議を採択した。しかし最大の障害となったのは、ドイツが将来、どの同盟に帰属するかであった。この点については、ヘルムート・コールがミハイル・ゴルバチョフと直接、交渉し、突破口を開いた。7 月 16 日、独ソ首脳は記者会見を開き、ソ連がドイツの NATO 帰属を承認したと、発表した。9 月 12 日、2+4 条約が調印され、ドイツは国家の主権を取り戻した。再統一への道がここに開けたのである。

1990 年 6 月 22 日、連合国軍・外交官用の国境検問所「チェックポイント・チャーリー」の解体。

2+4 = 1

1990 年 5 月 5 日、ボンで、両ドイツ国家と 4 つの戦勝国の外相が一堂に会して「2+4 会談」の第 1 回会合が開かれた。西独外務省の大広間「ヴェルトザール」で、ドイツ再統一の外的側面が協議された。

1990 年 5 月 5 日、ボン。協議の休憩時間。各国の外相に囲まれる東独外相マルクス・メッケル。ほんの数週間前まで、彼は教会の牧師であった。

外相集合写真。（左から）ジェイムズ・A・ベイカー（アメリカ）、エドゥアルド・シェワルナゼ（ソ連）、ハンス＝ディートリヒ・ゲンシャー（西独）、ロラン・デュマ（フランス）、マルクス・メッケル（東独）、ダグラス・ハード（イギリス）。

西独首相ヘルムート・コール（右）、ソ連大統領ミハイル・ゴルバチョフ（中央）、西独外相ハンス＝ディートリヒ・ゲンシャー（左）がコーカサスで会談、再統一したドイツが NATO に帰属することで合意した。写真は、アルチイ近郊、ミハイル・ゴルバチョフの山荘近くの休憩所。1990 年 7 月 15 日。

2+4 条約の調印はモスクワでおこなわれた。写真は（右から）ハンス＝ディートリヒ・ゲンシャー（西独外相）、ロータル・デ・メジエール（東独首相）、ロラン・デュマ（フランス外相）、その後ろに起立しているのがミハイル・ゴルバチョフ（ソ連大統領）。

再統一の 3 カ月前、西ドイツの連邦議会と東ドイツの人民議会は、ポーランドの西方国境の不可侵を宣言した。写真は、東ドイツとポーランドとの国境をなすオーダー川の風景。1990 年 6 月 20 日撮影。

出典：Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Reineke | Bundesregierung/Reineke | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Pfeil | Bundesregierung/Schaack

東独人民議会
西独基本法の適用範囲への東独の編入を議決

ドイツ統一への道筋については、1990 年春以来、激しい議論が展開された。西独基本法制定者の言葉を字義通りに受け止め、「ドイツ国民が自由な決断で議決した憲法が施行される日」に基本法は効力を失うと定めた西独基本法第 146 条に従って、統一ドイツのための新しい憲法の制定を主張する者は少数派であった。8 月 23 日、人民議会は圧倒的多数により、東独の西独への編入を想定していた基本法第 23 条に従って、1990 年 10 月 3 日付で西ドイツに編入されることを議決した。西独基本法が 40 年間にわたって憲法として維持され、西独市民にとってはもはやこれにかわるものが考えられないことを考慮した決定であった。8 月 31 日、わずか 8 週間の協議を経て、統一条約が調印された。この条約では、基本法の改訂、法の同化や東独行政の問題、財政の問題、労働・社会福祉・女性・文化領域の問題が定められた。見解のわかれていた点、たとえば将来的なドイツの首都機能の問題などは、先送りされるか、後に付属文書で規定された。その中にはシュタージ文書をめぐる問題も含まれていた。この夏、シュタージ文書の現地保管と閲覧の権利を求めて、東独の市民運動グループはハンガーストライキをおこなっていた。

延々と続く紛糾した議論を経て、1990 年 8 月 23 日月曜早朝、294 の人民議会議員は、東独の西独への編入を議決した。62 名の議員は反対票を投じた。

決　着

1990 年 8 月 31 日、西独内務相ヴォルフガング・ショイブレ（左）と東独首相府副長官ギュンター・クラウゼ（右）は、ベルリンの皇太子宮殿で統一条約に署名した。

1990 年 8 月 3 日、記者会見に臨む東独首相ロータル・デ・メジエール。写真には、当時東独政府報道官代行を務めていたアンゲラ・メルケル（現ドイツ連邦共和国首相）の姿が見える。

サッカーの東独代表チーム、ワールドカップにも出場したベルギー代表チームを 2 対 0 で破る。1990 年 9 月 13 日、これが東独代表の最後の試合であった。

1000 ページを越える統一条約。東西間で 56 日にわたって協議された。

市民運動グループは、かつてのシュタージ本部を占拠し、シュタージ文書の開示を求めた。垂幕には「占拠中！　文書はわれわれのものだ」とある。
1990 年 9 月 4 日、ベルリン。

再統一前日、東ベルリンの西独常設代表部代表フランツ・ベルテレは、自ら職場のプレートを取り外した。
1990 年 10 月 2 日。

出典：picture-alliance/dpa | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0803-017, Fotograf: Settnik | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0904-020, Fotograf: Lochmann | Bundesarchiv, Bild 183-1990-1002-018, Fotograf: o. Ang. | Bundesregierung/Reineke | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0913-017, Fotograf: o.Ang. | Bundesregierung/Lehnartz

1990 年 10 月 3 日
ドイツの分断は過去のものとなる

1990 年 10 月 3 日 0 時。国歌の響く中、ベルリンの旧帝国議会議事堂に、「ドイツの旗」が、今や統一ドイツの旗としてかかげられた。建国 41 年を 4 日後に控えて、東ドイツは国家としての存在を終えた。ドイツの分断は克服されたのである。100 万の人々が祝う議事堂周辺の通りや広場を、巨大な花火が照らした。40 年に及んだ社会主義統一党による独裁体制を東独市民が打倒してから、わずか一年にも満たなかった。ドイツ統一への道を整えたのは、平和革命と、自らの手による東ドイツの民主化であった。そして 1990 年、ドイツのすべての人々が、歴史上はじめて、平和と自由と民主主義のもとで、内外で承認された国境の中、隣国との友好と相互信頼のうちに暮らすことができるようになったのである。東ドイツの改革は、東欧平和革命の一環をなしていた。共産主義独裁体制のみならず、同時にヨーロッパの分断を克服したのが、この東欧平和革命である。ヨーロッパ分断の根源が、ナチス・ドイツによって第 2 次世界大戦がはじまった 1939 年にあったとすれば、1989 年は、ヨーロッパの自由の年として歴史に刻まれたのである。

1990 年 10 月 3 日、旧帝国議会議事堂前で、ドイツの人々は花火を打ち上げて再統一を祝った。

ひとつに

ライプツィヒのスペクトルム裁縫工場で旗の作りかえに精を出す様子。再統一に先立って旗の需要が急増、そのため東独国旗から東独独自の紋章を取り外して「ドイツの旗」に作りかえている。

ベルリンの旧帝国議会議事堂で、政府と野党の代表が参加して、統一ドイツの記念式典がおこなわれた。

ベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデンでは、数十万の人々が、ともに国民の祝典を祝った。1990 年 10 月 3 日。

再統一翌日。イェルク・シェーンボーム中将（連邦軍東部部隊司令官）が連邦軍第 7 部隊の指揮についた。部隊はかつて、東独国家人民軍の第 3 部隊であった。

連邦議会選挙が 1990 年 12 月 2 日、はじめてドイツ全土で実施されたのを受けて、1990 年 12 月 20 日、ベルリンの旧帝国議会議事堂で、自由選挙によって選ばれたはじめての全ドイツ連邦議会が開かれた。

出典：Bundesregierung/Reineke | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesregierung/Lehnartz | Bundesarchiv, Bild 183-1990-1004-025, Fotograf: Gahlbeck | Bundesarchiv, Bild 183-1990-0920-012, Fotograf: Grubitzsch (geb. Raphael)

主催

旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金

1998 年の設立以来、旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金（連邦検証基金）は、ドイツとヨーロッパの分断の歴史やその帰結、そして旧東独・東欧における共産主義独裁体制に関して、活発かつ複眼的に取り組んでいます。さまざまなプロジェクトを支援し、展覧会の開催や出版活動を通して議論に参加するほか、図書室やアーカイブの運営をおこなっています。当基金は、社会的検証、学術、政治、メディア、そして一般大衆といったさまざまな立場のあいだにあって、パートナーであり仲介者であることをめざしています。
www.stiftung-aufarbeitung.de

BUNDESSTIFTUNG AUFARBEITUNG

協賛

公益ヘルティ財団

ヘルティ財団の設立者は、1972 年に死去した有限会社ヘルティ百貨店オーナー、ゲオルク・カークです。財団はゲオルク・カークのライフワークに基づいて設立され、今日ではドイツ最大の民間財団のひとつとなっています。ヘルティ財団は、問題解決に向けた斬新なアプローチ、あらたなノウハウ、そして必要な財政支援によって変革へのきっかけを作り出す改革財団であることを使命とし、学校教育、大学、さらには学術研究分野における活動を通して、ドイツの改革に実践的な貢献を果たすことをめざしています。
www.ghst.de

Gemeinnützige Hertie-Stiftung

調査・構成

記憶工房

わたしたちの文化の基礎をなすのは、ひとりひとりの人間の記憶、そして集団の記憶です。記憶工房は、歴史・文化・政治・学問における記憶の重みと取り組み、展覧会や出版物のコンセプトの開発をおこなっています。迫真性、正確性、そして創造的なコミュニケーションが、その際のライトモチーフです。記憶工房は、アイデアの発端からプロジェクトの完成まで、皆様とともに歩みます。
www.erinnerungslabor.de

erinnerungslabor

記　憶

参考資料

Ehrhart Neubert『Unsere Revolution. Die Geschichte der Jahre 1989/1990』〔我らの革命。1989/1990 年の歴史〕
（Piper Verlag, München 2008）
協力：連邦検証基金

『Zeitenwende 1989/90 – Von der friedlichen Revolution zur Deutschen Einheit』
〔時代の転換 1989/90 年－平和革命から再統一へ〕
FWU〔学術・教育における映像・図像研究所〕及び連邦検証基金編
（Grünwald 2008）
貸与：各州・郡・市の映像センター、メディアセンター
販売：FWU、Bavariafilmplatz 3, 82031 Grünwald

『Wendebilder – Fünf Fotos und ihre Geschichten』
〔転換の諸像－ 5 枚の写真と、その物語〕
Karoline Kleinert, Vidicon GmbH による映像記録
連邦検証基金編（Berlin 2006）
学校のための付属資料多数

Mary Fulbrook『The People' s State: East German Society from Hitler to Honecker』
〔人民の国家－東ドイツの社会。ヒットラーからホーネッカーまで〕
（Yale University Press 2008）

Timothy Garton Ash『In Europe' s Name: Germany and the Divided Continent』
〔欧州の名において－ドイツ、そして分断された大陸〕
（Vintage 1994）

Frederick Taylor『The Berlin Wall. A World Divided. 1961 – 1989』
〔ベルリンの壁。分断された世界。1961-1989 年〕
（Harper Perennial 2008）

『ドイツ統一』
雪山伸一
（朝日新聞社 1993）

『歴史としてのドイツ統一』
高橋進
（岩波書店 1999）

リンク

www.berlin.de/mauer
www.bpb.de
www.bstu.de
www.chronikderwende.de
www.chronik-der-mauer.de/
www.deinegeschichte.de
www.dhm.de/lemo/html/DasGeteilteDeutschland/
www.geschichtsforum09.de
www.jugendopposition.de
www.mein-herbst-89.de
www.mdr.de/1989
www.politische-bildung.de/
www.stiftung-aufarbeitung.de
www.unseregeschichte.zdf.de
www.2plus4.de/

編集／謝辞

ご協力いただいた研究所やアーカイブ

ライプツィヒ市民運動アーカイブ（ABL）, ハンガリー共和国大使館 , コプレンツ／ベルリン連邦公文書館 , 連邦委託旧東独シュタージ資料館 , ドイツ通信社ピクチャーアライアンス〔dpa picture-alliance〕, ベルリン州立公文書館 , ライプツィヒ・ルンデ・エッケ博物館 , 連邦新聞・情報庁 , ローベルト・ハーヴェマン協会 , および Bernd Lindner (Leipzig), Steffen Reiche (Potsdam)

ご協力いただいた写真撮影者の方々

Johannes Beleites (Berlin), Albrecht Ecke (Berlin), Uwe Gerig (Quedlinburg), Heinz Löster (Leipzig), Klaus Mehner (Berlin), Jürgen Müller-Schneck (Berlin), Martin Naumann (Leipzig), Uwe Pullwitt (Leipzig) und Siegfried Wittenburg (Rostock)

構想、プロジェクトリーダー、テキスト：Ulrich Mählert, 連邦検証基金
調査、図像編集、構成：記憶工房
日本語翻訳：飛鳥井雅友

資料の出典について

資料の出典は、パネル最下部に記載しています。最初に大写真の出典をあげ、小写真については時計回りに出典をあげています。

旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金主催「平和革命から再統一へ」日本語版の制作と展示は、ドイツ外務省およびドイツ連邦共和国の援助を受けています。

Auswärtiges Amt